

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平9-19119

(43)公開日 平成9年(1997)1月17日

(51)Int.Cl. ⁸	識別記号	庁内整理番号	P I	技術表示箇所
H 0 2 K	19/36		H 0 2 K 19/36	A
	3/04		3/04	J
	3/28		3/28	J

審査請求 未請求 請求項の数12 O L (全 20 頁)

(21)出願番号 特願平7-162291

(22)出願日 平成7年(1995)6月28日

(71)出願人 000008013

三菱電機株式会社

東京都千代田区丸の内二丁目2番3号

(72)発明者 足立 克己

姫路市千代田町840番地 三菱電機株式会

社姫路製作所内

(72)発明者 田中 和徳

姫路市千代田町840番地 三菱電機株式会

社姫路製作所内

(72)発明者 末栖 恭子

姫路市千代田町840番地 三菱電機株式会

社姫路製作所内

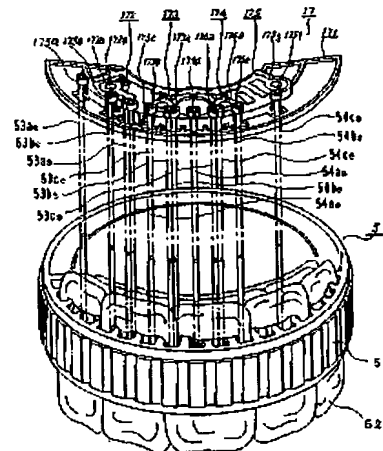
(74)代理人 弁理士 高田 守 (外4名)

(54)【発明の名称】 車両用交流発電機

(57)【要約】

【目的】 固定子巻線の結線の構成の簡易化と信頼性の向上を図る。

【構成】 電機子5の2組の三相星形に結線される各相コイルの引出線53ae~54csが電機子5の側面から軸方向にそれぞれほぼ平行に引出され、サーキットボード17のインサートターミナル172~175の各引出線接続部172a~174a、175a~175gと溶接され、インサートターミナル172~175を介して星形に結線されるとともに並列に接続される。星形に結線するために各相コイルの引出線を3本捻って接続したり、曲げ加工してインサートターミナルに接続したりする必要がない。また、ソルダレスで結線できる。従って、引出線に大きな応力を与えて損傷するおそれがなく、構成も簡易となる。



5: 電機子 51: 電機子軸心 52: 電機子巻線
 53a, 53b, 53c, 53d, 53e, 53f, 53g: 各相コイルの巻線の引出線
 54a, 54b, 54c, 54d, 54e, 54f, 54g: 各相コイルの巻線の引出線
 54a, 54b, 54c, 54d, 54e, 54f, 54g: 各相コイルの巻線の引出線
 17: サーキットボード 171: 絶縁
 172, 173, 174, 175: インサートターミナル

14

1

特開平9-19119

(3)

4

ット、2はリヤブラケット、3は回転子である。回転子3は、回転軸31と界磁鉄心32a、32bと界磁巻線33と冷却ファン34a、34bと集電装置35とを有している。そして、回転軸31はフロントブラケット1とリヤブラケット2とに軸受4a、4bを介して支持されている。界磁鉄心32a、32bはランドル型であり、界磁巻線33が内装され、界磁巻線33は集電装置35に接続されている。界磁鉄心32a、32b及び集電装置35は回転軸31に嵌着され、回転軸31と一体になって回転する。なお、冷却ファン34a、34bはそれぞれ界磁鉄心32a、32bの側面に嵌着されている。

【0004】5は固定子である電機子であり、固定子鉄心である電機子鉄心51と固定子巻線である電機子巻線52とを有し、電機子巻線52は電機子鉄心51のスロット51a（図22）に挿入され、コイルエンド52aが電機子鉄心51から軸方向に突出している。電機子鉄心51は円筒状の中空部を形成する内周壁を有し、この中空部に回転子3が挿入されている。

【0005】なお、この発電機は図21に示されるように、電機子巻線52はそれぞれ三相巻線53、54にて構成され、並列に接続された二組の三相巻線53、54にて構成され、中性点が外部に引出されている（詳細後述）。6は発電機の電圧を調整する電圧調整器、8は整流装置、9は仕切板、10はガイドであり、いずれもリヤブラケット2に内装されている。11は通しボルトであり、フロントブラケット1及びリヤブラケット2を電機子鉄心51の両側に固定している。

【0006】整流装置8は、図25、図26に示されるように、正極（+）側及び負極（-）側の冷却板81、82、ダイオード83、84、補助端子板86を有する。冷却板81、82は、それぞれ平面部に凹設された凹設部81a、82a及び放熱フィン81b、82bを有する。凹設部81b、82bにはダイオード83、84がそれぞれ半田付けされている。ダイオード83、84は図21に示されるように各相及び中性点当り1個計4個のダイオード素子でそれぞれ構成され、各4個のダイオード素子はそのカソード側あるいはアノード側を共通にして冷却板81、82にそれぞれ直接半田付にて固着されている。また、他方の極はリード83a、84a（図26）に接続され、リードの先端部にはV状に切り欠かれた端子83b、84bが形成されている。この端子83b、84bは、後述の補助端子板86の端子86aの位置まで引出されて端子86aと半田付されて略Y字形状をなしている（図25）。

【0007】補助端子板86は、電機子巻線52、電圧調整器6、及びダイオード83、84を電気的に接続するものであり、4個の端子86a及び補助端子86d、86eを有している。補助端子板86は、一枚の銅板を所定の形状に打抜いたものと一体に絶縁成形材料で基板

86bを成形し、銅板の不要部分を切断除去し、さらに端部を立ち起して基板86bに直線状に並べて配設固定された端子86aとされている。この端子86aには、ダイオード83、84の端子83b、84bが接続されるとともに電機子5からの三相接続引出線55及び中継線57（後述）がそれぞれ接続される。

【0008】また、図25の一番手前のa相用の端子86aは図の右下方へ延長されて先端部が切り起された補助端子86dが設けられており、この補助端子86dからa相の高圧を電圧調整器6へ発電機の電圧を制御するために電圧信号として供給する。さらに、同様に先端部が切り起された補助端子86eは、正極側の冷却板81に接続され、界磁巻線33に励磁電流を供給する（図21の回路図を参照）。なお、4個の端子86aにはそれぞれ半田の垂れ防止用の板紙87が嵌められている。

【0009】上記のような、ダイオード83、84が半田付固定された冷却板81、82を図26に示される状態に組合わせ、その上に補助端子板86を乗せ、端子86a部に板紙87を嵌め、仕切板9、ガイド10を乗せて、図26に示された状態に組立てた後、リヤブラケット2内に組込む。なお、仕切板9は冷却ファン34bのブレードとの対向面を確保するためのものであり、ガイド10はその側面部10aにて後述の三相接続引出線55及び中継線57を補助端子板86の端子86aに案内するためのものである。

【0010】電機子5は、回転する回転子3により励磁されて電機子巻線52に三相交流を発生する。電機子巻線52の一例として、図21の回路図に示されるように三相星形接続された二組の三相巻線53、54を並列に接続するとともに、中性点を外部に引出すものがある。すなわち、第一の三相巻線53と第二の三相巻線54とを有し、三相巻線53、54はおののおのa相、b相、c相の三相の波巻にされた各相コイルで構成されている。この例では、発電機は12極であり、電機子鉄心51のスロット51aの数は36、毎極当りのスロット数は3である。第二の三相巻線54は、第一の三相巻線53と、図22に示されるように物理的角度で30度（電気角で120度）ずらせて、巻線が集中することなく電機子鉄心51のスロット51aに巻かれている。

【0011】第一の三相巻線53の各相コイルは、図23に示されるように、その巻始めの引出線53as、53bs、53cs及び巻終りの引出線53ae、53be、53ceがコイルエンド52aから突出するように電機子鉄心51の軸方向に引出されている。第二の三相巻線54についても同様であり、各相コイルの巻始めの引出線54as、54bs、54cs及び巻終わりの引出線54ae、54be、54ceが引出されている。前述のように、第一及び第二の三相巻線53、54の各相コイルを30度ずらせて電機子鉄心51のスロット51aに内装している。

特開平9-19119

(4)

6

5

【0012】このため、第一の三相巻線53の各相コイルの巻始めの引出線53as、53bs、53csと第二の三相巻線54の各相コイルの巻終りの引出線54ae、54be、54ce、または第一の三相巻線53の各相コイルの巻終りの引出線53ae、53be、53ceと第二の三相巻線54の各相コイルの巻始めの引出線54as、54bs、54csがそれぞれ同じスロットに位置するようになる。この例(図22)では、第一の三相巻線53の各相コイルの巻始めの引出線53as、53bs、53csと第二の三相巻線54の各相コイルの巻終りの引出線54ae、54be、54ceとが同じスロットに位置している。このことから、6個の各相コイルの合計12本の引出線は、全部で9グループにまとめられる。

【0013】第一の三相巻線53の巻始めの各相コイルの引出線53as、53bs、53csと第二の三相巻線54の各相コイルの巻終りの引出線54ae、54be、54ceとが同じスロットに位置する場合、各相コイルの引出線は、例えば、G1:53ae、G2:53be、G3:54ae-53as、G4:53ce、G5:54be-53bs、G6:54as、G7:54ce-53cs、G8:54bs、G9:54cs、の9グループになる。この場合、三相接続に接続する相電圧側の引出線である三相接続引出線55は、G3:54ae-53as、G5:54be-53bs、G7:54ce-53csの3グループで構成される。

【0014】一方、図21に示される各三相巻線53、54の中性点53n、54nの結線は、図24に示されるように、各相コイルの中性点側の引出線、G1、G2、G4、つまり53ae、53be、53ceの3本の引出線と中性点中継線53nnの一方の端部とを一緒にねじって半田等で電気的に接続して中性点53nとする。また、G6、G8、G9、つまり54as、54bs、54csの3本の引出線と中性点中継線54nnの一方の端部とを一緒にねじって半田等で電気的に接続して中性点54nとする。しかる後、中性点53n、54nに絶縁チューブ56を挿入して曲げ成形する。

【0015】さらに、中性点中継線53nn、54nnの他方の端部に対応する整流装置8との接続がしやすい場所に引出し、中継線57として電機子5の軸方向に引出す。この中継線57の引出位置は、この例では、図24に示されるように三相換流引出線55の間にはさまれる位置に構成している。また、中性点53n、54n及び中性点中継線53nn、54nnは、リヤブラケット2やその他の部品と干渉しないように、電機子巻線52のコイルエンド528に図示しないワニスで固定されている。

【0016】電梯子5とリヤブラケット2との組付けは次のようにする。リヤブラケット2には、上述のように整流装置8、仕切板9、ガイド10があらかじめ組込ま

れている。電線5は、電線巻線52の三相接続引出線55（引出線G3：54ae-53as、G5：54be-53bs、G7：54ce-53cs）及び中継線57（53nn、54nn）を、図25に示されるように、おのおのガイド10に沿う形状に曲げ成形してお

【0017】次に、リヤブラケット2に電機子5に組付ける。このとき、補助端子板86の略Y字形状の端子86aの位置を三相接続引出線55及び中継線57の位置に合わせて組付ける。組付け後、補助端子板86の端子86aに三相接続引出線55及び中継線57をそれぞれ嵌め込み、加締め後半田付して電気的に接続する。この嵌め込み、加締め及び半田付作業は、電機子鉄心51の内側から、すなわち図20における右方から行う。この後、回転子3を電機子鉄心51内に装着する。

【0018】また、電機子5の他の例として、図27の回路図に示されるような中性点を引出さないものがある。図28はこのような電機子5を示す斜視図である。このような中性点53n、54nを引出す中継線57のない電機子5の場合は、中性点53n、54nの結線処理のみで、図28に示されるような構成となる。そこで、中継線57に対応する補助端子板86の端子86aを一つ空きにして、すなわち図25の左から2番目の端子86bを空きにして、組立てられる。

【0019】さらに、他の例として、第一の三相巻線53の形で構成される電機子の場合、各コイルの巻終わり引出線53ae、53be、53ceと巻始めの引出線53as、53bs、53csとで、引出線が合計6本となるものがある。この場合は、巻終りの引出線53ae、53be、53ceをねじって結線して中性点53nとし、巻始めの引出線53as、53bs、53csが三相誘引引出線55となる。

【0020】図20に示された従来の発電機は上記のよう
に構成されているために、次のような問題点があっ
た。

ア. 中性点53n、54nの結線を、引出線をねじって絶縁チューブ56を挿入し、曲げ成形して構成しているため、製造工程が煩雑で、作業中に巻線を傷つけたりすることもあり、信頼性に不安があった。

【0021】イ. さらに、中性点中継線53nn、54nnのある電機子の場合、中性点中継線が必要であるとともに、整流装置8との接続位置の関係上、中性点中継線53nn、54nnを引き回す必要があった。このように、中性点中継線53nn、54nnの有無による仕様差を、組込む電機子5の結線処理内容を上記図24あるいは図28に示されるように変えることで対応していた。また、この結線内容が第一の三相巻線53と第二の三相巻線54とを有する電機子と、第一の三相巻線53のみで構成される電機子とで異なり、作業が複雑であった。

特開平9-19119

(5)

8

【0022】そこで、上記のような問題点を解決するために提案された発明として、例えば実公昭45-32990号公報に記載されたものがある。このものは、中性点結線用導体とダイオード端子間結線用導体とダイオード端子間結線用導体とを円弧帯状の基板上に配設し、各導体同士を短絡片により連結し、整流装置の結線状態に応じて所定箇所の短絡片を切断するようにしたものである。このようにすることにより、中性点の構成のために3本の引出線を据って接続することや中性点中継線が不要となる。また、中性点の出力の要否にかかわらず一種類のサーキットボードで対応できる。

【0023】

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、実公昭45-32990号公報に記載された従来の発電機においても、なお次のような問題があった。

a. 中性点の出力の要否に合わせて切断する短絡片を変更しなければならず、多くの切断箇所の選択や短絡片の切断作業等を要し、作業が煩雑で誤りも生じやすい。

b. さらに、電機子のコイルの中性点側の引出線が挿入される孔と相電圧側の引出線が挿入される孔とが同じ円弧の上に配設されていらないので、引出線を曲げ加工して各孔に挿入しなければならない。図20に示された従来の発電機と同様に電機子の組付け時に引出線が変形したり、引出線に大きな応力加わる場合があった。

【0024】c. 特に、図20に示された従来の発電機においては、図25に示されるように電機子巻線52の三相接続引出線55及び中継線57は、電機子鉄心51の軸方向端部から突出しており、軸方向側面から見て円弧状に位置している。従って、電機子5の軸と垂直にされた補助端子板86の基板86b上に並ぶ端子86aとの接続には、ガイド10が必要であった。また、その曲げ位置も三相接続引出線55の各引出線G3:54ae-53as、G5:54be-53bs、G7:54ce-53cs及び中継線57によって異なる。このため、電機子5の組付け時に三相接続引出線55や中継線57が変形したり、大きな応力加わる場合があった。さらに、三相接続引出線55あるいは中継線57の曲げ位置の誤差により、最悪の場合、組付けが不可能になることがあった。

【0025】d. 三相接続引出線55及び中継線57と補助端子板86の端子86aとを半田付にて接続しなければならなかった。

e. また、三相接続引出線55や中継線57を図20、図25に示されるように仕切板73と、ファン34hとの間に収める必要がある。このため、ガイド10を設けなくてはならず、ファン34hとの対向面が平坦でなくなり、ファンの効率が悪くなり、また風騒音が大きくなる。

【0026】この発明は上記のような問題点を解決するためになされたもので、次のような車両用交流発電機を

得ることを目的とする。

a. 結線の構成が簡易化され、結線の信頼性が高い。
b. 複数のコイルが並列に接続される場合においても容易に結線ができ、結線の信頼性が高い。

c. 中性点を中継用接続装置の外部に引出す必要の有無にかかわらず、一様の中継用接続装置を用いて対応でき、中継用接続装置の標準化が可能である。

【0027】d. 車両用交流発電機の軸方向寸法が長くなるのを防止できる。

e. 中継用接続装置における接続用導体部の放熱が良

い。
f. 中継用接続装置における接続が溶ダスで可能である。

g. 整流装置と中継用接続装置との接続が容易である。

h. ファン効率が向上して冷却性能が良くなり、また騒音を低くできる。

j. 引出線の引出位置の誤差、振動、温度変化による膨張収縮等を吸収でき、組立が容易で接続の信頼性が向上する。

【0028】

【課題を解決するための手段】この発明の請求項1に記載の車両用交流発電機は、固定子鉄心の軸方向にほぼ平行に引き出された引出線を有する固定子巻線、この固定子巻線の引出線に接続された引出線接続部と整流装置に接続された出力用接続部と引出線接続部を出力用接続部に接続する接続用導体部とを有し固定子巻線を所定の結線状態に結線する中継用導電部材及びこの中継用導電部材を固定支持する支持部材が設けられた中継用接続装置、を備えたものである。

【0029】この発明の請求項2に記載の車両用交流発電機は、固定子巻線は三相の巻線を有し、中継用接続装置は出力用接続部が中性点を外部に引き出しうようにされたものである中性点側の中継用導電部材及び出力用接続部が相電圧を外部に引出しうようにされたものである3個の相電圧側の中継用導電部材が設けられたものであって、中継用接続装置の中性点側の各引出線が接続される部材に三相の巻線の中性点側の各引出線が接続されるとともに相電圧側の中継用導電部材の引出線接続部に三相の巻線の相電圧側の引出線がそれぞれ接続されて三相の巻線が星形結線されて相電圧側の中継用導電部材の出力用接続部から三相交流出力が出力され、整流装置の交流側が相電圧側の中継用導電部材の出力用接続部に接続され三相交流出力を直流出力に整流するものである。

【0030】この発明の請求項3に記載の車両用交流発電機は、三相の巻線がそれぞれ複数のコイルを有するものであり、この複数のコイルが中性点側の中継用導電部材及び相電圧側の中継用導電部材を介して並列に接続されたものである。

【0031】この発明の請求項4に記載の車両用交流発

特開平9-19119

(6)

10

9

電機は、中継用導電部材の接続用導体部が板状の形状にされたものであり、支持部材が成形用絶縁材料により上記板状の接続用導体部と一体に円弧板状に成形されたものである。

【0032】この発明の請求項5に記載の車両用交流発電機は、中継用導電部材の接続用導体部の少なくとも一部が支持部材から露出されたものである。

【0033】この発明の請求項6に記載の車両用交流発電機は、中継用接続装置の引出線接続部に引出線が冶金的接合により接続されたものである。

【0034】この発明の請求項7に記載の車両用交流発電機は、中継用接続装置の引出線接続部と引出線との冶金的接合が支持部材の固定子側と反対の側に行われているものである。

【0035】この発明の請求項8に記載の車両用交流発電機は、整流装置が板状の交流側端子を有するものであり、中継用接続装置の中継用導電部材の接続用導体部と出力用接続部とが板状の導体で一体に形成されたものであり、整流装置の交流側端子が出力用接続部に固定子の軸方向に隣付部材により締付けられて接続されたものである。

【0036】この発明の請求項9に記載の車両用交流発電機は、中継用接続装置の支持部材がその外周部に設けられた切欠きを有し、各引出線接続部がこの切欠き部に配設されるとともに径方向外方から引出線を挿入しうるようにされたものである。

【0037】この発明の請求項10に記載の車両用交流発電機は、回転子がブラケット内に外気を吸入する冷却ファンを有するものであり、中継用接続装置がブラケット内に配設され中継用接続装置の支持部材と冷却ファンの羽根とが軸方向に対向するものである。

【0038】この発明の請求項11に記載の車両用交流発電機は、支持部材がその外周部に固定子側に傾いた傾き部分を有するものである。

【0039】この発明の請求項12に記載の車両用交流発電機は、引出線が局部的曲げ部を有するものであり、この局部的曲げ部を介して中継用接続装置の引出線接続部に接続されたものである。

【0040】

【作用】この発明の請求項1に記載の車両用交流発電機においては、固定子巻線の引出線が固定子鉄心の軸方向にほぼ平行に引出され固定子の軸方向側面に配設された中継用接続装置の中継用導電部材の引出線接続部に接続され、出力用接続部から交流出力が出力される。すなわち、引出線は中継用導電部材を介して所定の結線状態に結線され、固定子巻線の出力は中継用導電部材を介して出力される。従って、巻線を所定の結線状態に結線するために引出線同士をねじって接続しなくてよい。また、引出線を曲げ加工するときに大きな外力を加えて損傷したりするおそれがない。さらに、中継用接続装置を介し

て整流装置に接続されるので、引出線を曲げ加工してから整流装置に接続する必要もなくなる。よって、結線部分の構成が簡易となり、また結線の信頼性が向上する。さらに、結線作業も容易になる。

【0041】この発明の請求項2に記載の車両用交流発電機においては、三相の巻線の中性点側の引出線が中性点側の中継用導電部材に接続され、相電圧側の引出線が三相の相電圧側の中継用導電部材に接続されて、三相星形結線される。また、中性点側の中継用導電部材には中性点側の出力用接続部が設けられ、中性点出力を必要とする場合と必要としない場合とに対応できるので、整流装置の結線が異なるものに対して同一種類の中継用接続装置を用いることができ、標準化が可能となる。

【0042】この発明の請求項3に記載の車両用交流発電機においては、三相の巻線の各複数のコイルは中継用導電部材を介して並列に接続され引出線を捻って接続しなくてよいので、接続の信頼性が向上する。また、接続の構成も簡潔になる。

【0043】この発明の請求項4に記載の車両用交流発電機においては、接続用導体部及び支持部材がともに板状であるので、板厚方向の寸法が小さくなり、車両用交流発電機の軸方向寸法が長くなるのを防止できる。また、支持部材が接続用導体部と一体に成形されているので、製作が容易である。

【0044】この発明の請求項5に記載の車両用交流発電機においては、接続用導体部が支持部材から露出しているため通電によるジュール熱の放熱が良くなり、温度上昇を低く抑えることができる。

【0045】この発明の請求項6に記載の車両用交流発電機においては、中継用接続装置の引出線接続部に引出線を冶金的接合により接続しているため、溶ダレス接続となり、作業が容易で接続の信頼性も向上する。

【0046】この発明の請求項7に記載の車両用交流発電機においては、引出線接続部と引出線との冶金的接合を支持部材の固定子側と反対の側に行うことができ、冶金的接合の作業が容易になる。また、冶金的接合作業のための空間を中継用接続装置と固定子との間に設けなくともよいので、車両用交流発電機の軸方向寸法が長くなるのを防止できる。

【0047】この発明の請求項8に記載の車両用交流発電機においては、整流装置の板状の交流側端子を中継用接続装置の板状の相電圧側の出力用接続部に固定子の軸方向に隣付部材により締付けて接続するので、接続作業が容易でかつ溶ダレスで接続が可能となる。

【0048】この発明の請求項9に記載の車両用交流発電機においては、中継用接続装置の各引出線接続部が支持部材の外周部に設けられた切欠き部に配設され、かつ径方向外方から引出線を挿入しうるので、中継用接続装置を径方向に移動させて引出線接続部に各引出線を挿入することにより接続でき、引出線を中継用接続装置に貫

特開平9-19119

(7)

12

11

通させるために引出線接続部にきちんと位置合わせする必要がないので、接続が容易である。

【0049】この発明の請求項10に記載の車両用交流発電機においては、中継用接続装置の支持部材と冷却ファンの羽根とが軸方向に対向しているため、空気の流れが良くなりファン効率が向上する。従って、冷却性能がよくなり、またファンの騒音も低くなる。

【0050】この発明の請求項11に記載の車両用交流発電機においては、支持部材の傾き部が固定子側に傾いているので、ファンによる冷却風が固定子側へ効果的に導かれ、固定子を冷却する。

【0051】この発明の請求項12に記載の車両用交流発電機においては、引出線に設けられた局部的曲げ部が変形することにより、組立の寸法誤差を吸収し、また振動や温度変化にともなう巻線の膨張収縮による応力を緩和する。

【0052】

【実施例】

実施例1. 図1～図6はこの発明の一実施例を示すものであり、図1は電機子の斜視図、図2は図1に示すサーキットボードを図1の下方から見上げて示す正面図である。図3は図1に示すサーキットボードを図1の上方から見て示す背面図、図4は発電機の要部を示す要部断面図、図5は整流装置の補助端子板の平面図、図6はダイオードの端子を示す平面図である。

【0053】これらの図において、17は中継用接続装置であるサーキットボード、18は整流装置である。サーキットボード17は、中継用導電部材であるインサートターミナル172～175及び支持部材である基板171を有する。基板171は成形用の絶縁材料によりインサートモールドによりインサートターミナル172～175と一体に成形され、略円弧板状の形状を有し、その背面側（電機子の側と反対の側）の円弧の周縁部、中央部等に適宜補強リブが設けられている（図3参照）。

【0054】基板171には、後述のインサートターミナルの引出線接続部172a、173a、174a等と対応させて、図2に示されるように長方形の窓部171a～171jが設けられている。この窓部171a～171jは、電機子巻線52の各相コイルの引出線53a s、53b s、53c s、53a e、53b e、53c e等を貫通させるためのものである。なお、インサートターミナル172～175は基板171の背面に露出している。

【0055】インサートターミナル172～175は、1枚の銅板を所定の形状に打抜き加工したものと一体に基板171を絶縁成形材料により成形し、所定の箇所を切断及び切断のうえ除去してそれぞれインサートターミナル172～175に分離される。インサートターミナル172は相電圧側の引出線接続部172aを有する。引出線接続部172aは、電機子巻線52の引出線53

a s、54a eと対応するよう、円弧状に位置させて背面側（図1、図3の上方）へ立ち起されて基板171の電機子の側と反対の側に突出されており、丸銅線の引出線をクランプしうるように端部が略コ字形状に放射方向外方に開かれている。また、円形の孔が中央部に設けられた円板状の相電圧側の出力用接続部である接続端子172bと、引出線接続部172aと接続端子172bとを電気的に接続する板状の接続用導体部である導電板172cとを有する。

【0056】インサートターミナル173、174は、相電圧側の引出線接続部173a、174aを有する。引出線接続部173a、174aは、電機子巻線52の各引出線53b s、54b e、53c s、54c eと対応するよう、円弧状に位置させて背面側（図1、図3の上方）へ立ち起され、丸銅線の引出線をクランプしうるように端部が略コ字形状に放射方向外方に開かれている。また、円形の孔が中央部に設けられた円板状の相電圧側の出力用接続部である接続端子173b、174bと、引出線接続部173a、174aと接続端子173b、174bとをそれぞれ電気的に接続する板状の接続用導体部である導電板173c、174cとを有する。

【0057】インサートターミナル175は、中性点側の引出線接続部175a～175fを有する。引出線接続部175a～175fは、電機子巻線52の引出線53a e、53b e、53c e、54a s、54b s、54c sと対応するよう、図示の如く同じ円弧の上に位置させて背面側（図1、図3の上方）へ立ち起され、丸銅線の引出線をクランプしうるように、端部が略コ字形状に放射方向外方に開かれている。また、円形の孔が中央部に設けられた円板状の中性点側の出力用接続部である接続端子175gと、引出線接続部175a～175fと接続端子175gとを電気的に接続する板状の接続用導体部である導電板175hとを有する。

【0058】なお、各接続端子172b、173b、174b、175gは基板171の各窓部171a～171jに対応して図2における上方へ突出されており、図1における電機子5側には突出するものがないようにされている。また、後述のボルト176の頭が図4に示されるようにサーキットボード17の基板171の面と面一になっており、冷却ファン34bと対向する平坦な面を形成している。

【0059】整流装置18は、図25、図26に示された従来のものとほぼ同様のものであるが、補助端子板186の構成及びダイオード183、184の端子183b、184bの形状が異なる。補助端子板186は、図5に示されるように4個の端子186a及び補助端子186d、186eが、サーキットボード17と組合せられたときに各端子186aが接続端子172b、173b、174b、175gと対向するように配設され、

特開平9-19119

(8)

13

これらと一体に絶縁成形材料にて成形（インサートモールド）された円弧帯状の絶縁支持板186bが形成されている。なお、端子186aには雌ねじがそれぞれ設けられている。

【0060】補助端子186dは図5における右端のa相用の端子186aと一体の銅板にて形成されて先端部が切り起されており、図25における従来の補助端子86dと同様に電圧調整器6へ発電機の電圧を制御するための電圧信号を供給する。また、補助端子186eは詳細は図示しないが、補助端子板186が図25に示された補助端子板86と同様に冷却板81、82の上に重ねられたときに、正極側の冷却板81と電気的に接触し、整流装置18の出力を昇圧巻線33に供給する（図7の回路図参照）。

【0061】以上のような補助端子板186は、所定の形状に打抜き加工された1枚の銅板と一体にインサートモールド法により基板186bを形成し、不要部分を切断除去して、端子186a及び補助端子186d、186eに分離することにより製作される。また、ダイオード183、184の端子183b、184bは、図6に示されるように先端部が爪状にされ、リード183aはL状に折曲げられて、締付部材であるボルト176によりサーキットボード17の接続端子172b、173b、174b、175gに締付けられ、電気的に接続されている。

【0062】上記サーキットボード17と電機子巻線52との接続は次のようにして行う。中性点側の引出線である第一の三相巻線53の各相コイルの巻始めの引出線53ae、53be、53ce及び同じく中性点側の引出線である第二の三相巻線54の各相コイルの巻始めの引出線54as、54bs、54cs並びに相電圧側の引出線である第一の巻線の各相コイルの巻始めの引出線53as、53bs、53cs及び同じく相電圧側の引出線である第二の三相巻線の各相コイルの巻終りの引出線54ae、54be、54ceは、各三相巻線53、54の各相コイルが電機子鉄心51へ挿入された状態では、円弧状に並んで電機子鉄心の軸とほぼ平行に突出した状態にある。この状態のままで、各引出線を基板171に設けられた窓部171a～171jを貫通させ、基板171の電機子5側と反対の側に突出する引出線接続部172a、173a、174a、175a～175fへそれぞれ挿入する。

【0063】しかる後、各引出線接続部に引出線を加締めて引出線を固定し、両者を一括して溶接することにより電気的に接続する。例えば、引出線53aeは、窓部171aを貫通し、引出線接続部175aと接続され、同様に他の引出線53be、53ce、54as、54bs、54csも対応する引出線接続部175b～175fと接続されて導電板175hにより中性点側の接続端子175gに導かれる。また、例えば引出線53as

14

と54aeとは、窓部171cを貫通し、引出線接続部172aに接続され接続端子172bに導かれる

【0064】続いて、予め整流装置18が内装されたリヤブラケット2に電機子鉄心51を嵌め込む。このとき、補助端子板186の端子186aの雌ねじ部の位置に中継用接続装置の4個の接続端子172b、173b、174b、175gの位置を合わせて組付ける。また、同時にダイオード183、184の端子183b、184bを補助端子板186の端子186aと接続端子172b、173b、174b、175gとの間にそれぞれ挿入する。この時点では、まだ回転子3は挿入されていないので、図4における右側からボルト176を各接続端子に貫通させて端子186aの雌ねじと螺合させて電機子5の軸方向に締付けてダイオード183、184の端子183b、184bと接続端子172b、173b、174b、175gとをおおの電気的に接続する。以上のようにして、図4に示される状態に組立てられる。その他の構成については、図20に示された従来のものと同様である。

【0065】上記のように構成された発電機は、電機子5の三相巻線53、54の各相コイルの全ての引出線53as、53bs、53cs、53ae、53be、53ce、54as、54bs、54cs、54ae、54be、54ceは電機子5の軸方向にほぼ平行に引出されている。また、サーキットボード17のインサートターミナル172～175を介して2個の各相コイルがそれぞれ並列に接続されてこの発明における三相の巻線を構成するとともに、この三相の巻線が三相星形結線されている。また、相電圧及び中性点は接続端子172b、173b、174b、175gを介して外部に引出されている。

【0066】発電機は以上のように構成されているので、全ての引出線に対応するスロット51aから電機子5の軸方向にほぼ平行に引出し、サーキットボード17の各引出線接続部と接続すればよい。従って、従来のもののように三相接続引出線55や中継線57を整流装置18と接続するために曲げ加工したり、ガイド73aを設ける必要がない。また、中性点53n、54nを構成するために引出線を捻って結線することを要しないし、さらに中性点中継線53nn、54nnや整流装置18と接続するための複雑な引回しも不要となる。従って、結線の構成が簡潔となり、また引出線に不要な曲げ等、外力を加えることなく結線ができ、信頼性を向上できる。

【0067】また、図21及び図24に示される発電機のように中性点出力を要する場合と、図27及び図27に示される発電機のように中性点出力を要しない場合と、で複雑な工程上の差が生じることがない。すなわち、整流装置の結線に応じてダイオードを省き、中性点側の出力用接続部である接続端子175gにボルト17

特開平9-19119

(10)

18

17

いる。

【0078】放熱フィン282b、ダイオード取付穴282e等を有する冷却板282はアルミニウム合金を用いてダイカスト法にて一体成形されている。なお、放熱フィン281b及び放熱フィン282bとはそのフィン素子のピッチ角を同じにして造られている。後述するが、両放熱フィンのフィン素子の位置を放射状に合せて冷却ファン34bによる冷却風の流れを良くするためである。また、ダイオード取付穴281e、282eを凹設しているのは、後述のダイオード283、284の位置決め及び半田の流出防止のためである。

【0079】正極側の冷却板281の径方向外側に所定の間隙を設けて負極側の冷却板282が、冷却板281に径方向に重なるように、かつ取付面281a、282aが回転軸3と直交する同一平面上に位置するようにして、リヤブラケット12内に図8に示されるようにして収容されている。また、おのおの放射状に設けられた放熱フィン281bと放熱フィン282bとは、そのフィン素子が径方向に重なるようにされ、フィン素子間を冷却風が効果的に流れるようにされている。

【0080】283、284は正極側及び負極側のダイオードである。図4におけるダイオード283、284と同様のものであるが、引出されたアノード側あるいはカソード側のリード283a、284aが図11に示されるようにし字状に折曲げられ、端部が放射方向に所定の間隙を設けて対向している（図10）点が異なる。正極側のダイオード283は冷却板281のダイオード取付穴281eにそのカソード側の電極面が電気的かつ熱的に良好な接触状態を確保して半田付されている。負極側のダイオード284は冷却板282のダイオード取付穴282eにそのアノード側の電極面が同様に半田付されている。正極側の冷却板281と負極側の冷却板282とは、固定用孔281d、282dの部分、間に鍮部を有する中空筒状のモールドインシュレータ285（図9）を介して絶縁して重ねられている。

【0081】補助端子板286は、図10に示されるダイオード283、284のリード283a、284aの位置に対応させて図12に示されるように放射状に配設された銅板製の4個の端子286a、補助端子286d、286e及びこれと絶縁成形材料にて一体に成形された円弧帯状の絶縁支持板286bを有している。補助端子板286は図5に示された補助端子板186と同様に、所定の形状に打抜き加工された1枚の銅板と一体にインサートモールド法により基板286bを形成し、不要部分を切除去して、端子286a及び補助端子286d、286eに分離することにより製作される。なお、端子286aはバリリング加工された部分に雌ねじがそれぞれ設けられている。また、図13に示されるようにリード283a、284aと接続される舌片部286cが端子286aからし字状に折曲げられて形成され

ている。

【0082】補助端子286dは図12における右端（図9においては左端）のa相用の端子286aと一体の導体にて形成されており、電圧調整器6へ発電機の電圧を制御するための電圧信号を供給する。また、補助端子286eは、補助端子板286が図9に示されるように冷却板281、282の上に重ねられたときに、正極側の冷却板281の右方側の重ね合せ部281cの固定用孔281d（図10）の周辺部に電気的に接触し、整流装置28の出力を界磁巻線33に供給する（図7の回路図参照）。

【0083】次に、整流装置28の組立の手順を図9を参照しながら説明する。予め、冷却板281、282にそれぞれ4個のダイオード283、284を半田付しておく。次に、負極側の冷却板282の内径側に正極側の冷却板281を置き、重ね合せ部281cを間にモールドインシュレータ285を挟んで負極側の冷却板282に重ねる。このとき、両放熱フィン281b、282bの各フィン素子がリヤブラケット12の径方向に重なり、側方からみて直線状になる。フィン素子間を冷却風が放射方向に円滑に流れるようにするためである。この上に補助端子板286を、その舌片部286c（図13）をダイオード283、284のリード283a、284aの対向する間隙に挿入するようにして重ね、図示しないボルトを固定用孔281dに挿通してリヤブラケット12に固定する。次に、舌片部286cとダイオードのリード283a、284aとを一括して半径方向から溶接用電極で挟んでスポット溶接する。

【0084】以上のようにして部分組立された電機子5、サーキットボード17、整流装置28をさらに次のようにして総組立し、図8に示される状態にする。リヤブラケット12に整流装置28、電圧調整器6等を内装する。この整流装置28等が内装されたリヤブラケット12に、電機子5に組付けられたサーキットボード17の接続端子172b、173b、174b、175gの位置（図3参照）に整流装置28の補助端子板286の端子286aの位置を合わせて、組込む。次に、ボルト176を、回転子3がまだ挿入されていない電機子5の内側からサーキットボード17の各接続端子に貫通させて補助端子板286の各端子286aに設けられた雌ねじと螺合させて電機子5の軸方向に締付、電気的に接続する。その他の構成については、図4に示された実施例と同様であるので、相当するものに同一符号を付して説明を省略する。

【0085】この実施例においては、電機子5及びサーキットボード17は図1に示された実施例と同様のものであるが、改良された整流装置28と組合わせたものである。すなわち、整流装置28は上記のように、両放熱フィン281b、282bの各フィン素子がリヤブラケット12の径方向に重なり、側方からみて直線状になる

時間平9-19119

16

6を組込まないことで対応でき、一種類の中継用接続装置で対応できる。これにより、中継用接続装置の標準化や作業の簡略化を図ることができる。

【0069】また、サーキットボード17は板状のインサートターミナル172~175と一体に成形された板状の基板171を有しているのので、サーキットボード17の厚さ（電機子5の軸方向の寸法）を薄くでき、発電機の軸方向の長さが長くなるのを避けることができる。なお、インサートターミナル172~175は一部が露出しており放熱が良くなるので、温度上昇を低く抑えることができる。さらに、引出接続部は、サーキットボードから電機子側と反対側へ突出しているので、引出線との加締め、溶接作業がやりやすい。

【07070】また、複雑な構成のサーキットボード17の引出線接続部と引出線との接続部は電線子と反対側に突出させ、冷却ファン34bとの対向面は、ボルト176が突出しないようにして平坦に構成しているので、冷却ファンのブレードとの対向面が平坦となり、ファン動作時の冷却材の向くとともに、騒音低減がはかれる。

【0071】実施例2。電機5が単一の三相巻線53のみで構成される場合、つまりこの発明における三相の巻線が各1個の各相コイルで構成され、各相コイルの引出線が計6本の場合、引出線接続部175d、175e、175fが空きになり、引出線接続部172a、173a、174aに各々1本の引出線が接続されることになるだけで、同様に構成される。もちろん、引出線接続部172a、173a、174aの開口幅を引出線接続部175a等と同じ引出線1本用のものと同じにし、深さを深くして径方向に2本の引出線を重ねて加減めるようにし、引出線が1本のと2本のとをきと同じものを用いるようにしてもよい。

【0072】以上のように構成することにより、引出線の数が異なっても、サーキットボードは一つで共用できる。図1の実施例と同様に中性点出力を要する場合と中性点出力を要しない場合とで複雑な工程上の差が生じることがない。すなわち、整流装置の結線に応じてダイオードを省き、中性点側の出力用接続部である接続端子175gにボルト176を組込まないことで対応できる。また、別のサーキットボードを用いて、引出線接続部172a、173a、174aの開口幅を引出線接続部172e等と同じ引出線1本用の開口幅のものにしてもよい。

【0073】実施例3. 図8～図13は、さらにこの発明の他の実施例を示すものであり、リヤブラケット及び整流装置の構成が異なるがサーキットボードは図1の実施例と同様のものである。図8は発電機の要部を示す要部断面図、図9は整流装置の斜視図、図10は整流装置の冷却板部分を示す平面図、図11は図10における切断面A-Aにおける冷却板部の断面を示す断面図である。図12は整流装置の補助端子板の平面図、図13は補助端子板の図12における切断面B-Bにおける断面を示す断面図である。なお、発電機の回路図は図7に示されたものと同様のものである。

【0074】これらの図において、12はリヤブラケットであり、図20に示された従来のものとは通風孔の位置及び形状が異なる。リヤブラケット12は図における左方に底面壁12aを有する中空円筒状であり、底面壁12aには軸方向に貫通して通風孔12bが設けられ、外周部には径方向に貫通する通風孔12cが設けられている。

【0075】次に、整流装置28の構成について図8～図13を参照しながら説明する。281は正極側の冷却板であり、略円弧帯状に形成され、一方の側が平面状の取付面281aとされ、他方の側に図8における左方（図9における下方）に突出し回転軸3を中心とする放射状の放熱フィン281bが設けられている。また、冷却板281の円弧方向（周方向）の両端部及び中央部の3箇所には、図9、図10に示される如く後述の冷却板282と（リヤブラケット12の）軸方向に重なるように外縁方向に突出し突出長さ281cを有し、この突出部は図9、図10に示される如く冷却板281dが設けられている。

の重ね合せ部に固定用孔281dが設けられている。
【0076】なお、この3個の固定用孔281dのうち1個(図9)は、リヤブラケット12を図8の左方へ貫通し図示しないバッテリーに接続されるB端子とされる。この実施例では、図示しないが中央のものをB端子としている。なお、放熱フィン281b、重ね合せ部281c等を有する冷却板281はアルミニウム合金を用いてダイカスト法にて一体成形されている。また、取付面281aには長方形に凹設された4個のマイナード取付穴281eが放射状に設けられており、後述の正極側のマイナード283が半田付けされている。

【0077】282は負極側の冷却板であり、冷却板281よりも大きい曲率半径の略円弧帯状に形成され、一方の側が取付面282aとされ、他方の側に図9における下方に突出し回転軸3を中心とする放射状の放熱フィン282bが設けられている。冷却板282には図10に示されるように冷却板281の重ね合せ部281cと回転軸3の軸方向に重なる部分に固定用孔282dが設けられている。取付面282aには長方形に凹設された4個のダイオード取付穴282eが放射状に設けられており、後述の負極側のダイオード284が半田付されて

19

と異なる。

【0909】サーキットボード37の基板371は冷却風の排出部周リ、すなわち図17における下方に電機子5側に所定の角度 θ 、例えば30度の角度をもって傾けられた傾き部378を有している。この傾き部378は、図16に示されるようにリヤブラケット22の内周部に近接するよう延長して円弧状に形成され、両者の間の隙間から冷却風が漏れにくいようにしている。サーキットボード37のその他の構成は図2及び図3に示されたサーキットボード17と同様のものである。

【0091】図1はリヤブラケットであり、リヤブラケット22は、図16に示されるように中心部が図の左方に凹設された凹設部22aを有している。凹設部22aの外周部、すなわち負極側の冷却板382（後述）が直付けされる直付部22bの左側には、正極側の冷却板281の放熱フィン281bのピッチ角と同じピッチ角にて放熱用のフィン22cが一体に放射状に複数個形成されている。なお、フィン22cの断面は図16の左下部にフィン22cと重なり点線Sで示されたような山形の形状をしている。なお、このリヤブラケット22はアルミニウム合金でダイカスト法にて製作されている。

【0092】凹設部22aの図16における左側部分には、凹設部22aを軸方向に貫通する長孔状の通風孔22dが径方向に2個間隔をおいて、図16の左側方からみて放射状に6ヶ所、計12個設けられている。凹設部22aの外周部の各フィン22cの間には回転軸3を中心として放射状にリヤブラケット22を貫通する通風孔22eが上記通風孔22dの位置に対応させて形成されている。また、ダイオード284及び電機子5の三相巻線53、54の各相コイルの引出線と対向するリヤブラケット22の最外周部22fには通風孔22gが、コイルエンド52aに対向する部分には通風孔22hが設けられている。

【0093】次に、窒流装置38の構成について説明する。正極側の冷却板281については図8、図9に示されたものと同様のものである。負極側の冷却板382は、冷却板281よりも大きい曲率半径の略円弧帯状に形成され、一方の側が取付面382aとされ、他方の側が平面状の直付部382bとされ、アルミニウム合金を用いてダイカスト法にて成形されている。その他の構成については、図10に示された放熱フィン281と同様のものであり、取付面382aには4個のダイオード284が半田付されている。

【0094】正価側の冷却板281の外側に径方向に所定間隔を設けて負価側の冷却板382が冷却板281に径方向に重なるように、かつ取付面281a、382aが回転軸3と直交する同一平面上に位置するようにして、配設されている。正価側の冷却板281はリヤブラケット22の凹部22aに収容され、負価側の冷却板382は、直付部382bがリヤブラケット22の直付

(12)

特開平9-19119

21

部22hに熱を良好に伝えるように熱伝導性の良いシリコンコンパウンドを充填しかつ十分に接触面積を確保して直付けされている。また、おのおの放射状に設けられた放熱フィン281hとフィン22cとは、そのフィン素子が径方向に重なるようにされている。その他の構成については、図8に示されたものと同一のものである。

【0095】以上のように構成された発電機においては、サーキットボード37の基板371の径方向外方にリヤブラケット22に近接させて傾き部分378を設けているので、冷却ファン34hによってリヤブラケット22の吸気孔22d、22e、22gから吸入される冷却風が、放熱フィン22c、281hを効果的に冷却する。また、ダイオード284、283周辺を通過して中心部の方を回ってから排気孔22hから排出される。すなわち、サーキットボード37の傾き部378により、図における一点鎖線の矢印W2にて示されるような排気孔22hから出て吸気孔22gから再び入るような循環する流れを防いで、効果的な冷却風の流れW1が得られるようにしている。

【0096】実施例6、図18はさらにこの発明の他の実施例を示す発電機の要部を示す要部断面図である。158は引出線の一部を半円形に曲げ加工して形成した局部的曲げ部であるベンド(bend)である。ベンド158は、電機子巻線52の各相コイルの全ての引出線において、電機子5とサーキットボード17の引出線接続部との間に、おのおの形成されている。なお、図18では引出線接続部172aに接続された三相接続引出線55(53as、54ae)におけるベンド158を示している。なお、ベンド158は、図19(a)～(e)の模式図に示されるような種々の形状のベンド158a～158e、あるいはこの発明の目的を損わない範囲で他の形状のものとしてもよい。

【0097】上記のように、電機子5の各相コイルの引出線にベンド158を設けることにより、ベンド158が、引出線の寸法誤差を吸収して組立時に巻線に大きな応力がかかるのを防止し、また振動や熱膨張による等による応力を緩和する。従って、信頼度が向上する。なお、この発明における固定子鉄心である電機子鉄心51の軸方向にはほぼ平行に引出された固定子巻線の引出線とは、上記ベンドのように若干の曲げ部分等を有する引出線を含むものであり、この発明の目的を損わない範囲で引出線に若干の曲り等があってもよい。

【0098】その他、上記各実施例において、引出線(例えば53as、54ae)と引出線接続部(例えば172a)との接続は加締め後溶接するものを示したが、ヒュージングや綴づけ等他の冶金的接合、圧着あるいは半田付等によるものであってもよい。上記各実施例は、図21に示された回路に対応するもので、中性点側にもダイオード283、284を設けるものであった。

22

しかし、図27に示される回路に示される発電機の場合は、中性点を出力する必要がないので、中性点側の出力用接続部である接続端子175g部のボルト176と、対応するダイオードを省略すればよい。

【0099】また、図17に示された実施例において、傾き部378の傾き角が30度のものを示したが、ブラケットやコイルエンドの形状等に合せて他の角度のもの、例えば10度～30度程度のものにしてもよい。なお、上記各実施例に示したものを適宜組合せてもよいことはいうまでもない。また、発電機は三相星形結線のものに限られず、三角結線や単相の発電機でもよく、また誘導発電機等であっても同様の効果を奏する。また、巻線は3個以上のコイルが並列に接続されて構成されるものであってもよい。

【0100】

【発明の効果】以上のようにこの発明の請求項1に記載の車両用交流発電機によれば、固定子鉄心の軸方向にはほぼ平行に引き出された引出線を有する固定子巻線、この固定子巻線の引出線に接続された引出線接続部と整流装置に接続された出力用接続部と引出線接続部を出力用接続部に接続する接続用導体部とを有する中継用導電部材及びこの中継用導電部材を固定支持する支持部材が設けられた中継用接続装置、を備えたので、引出線は中継用導電部材を介して所定の結線状態に結線されることになり、引出線同士をねじって接続したりあるいは曲げ加工のために引出線に不要な外力を加えたりするおそれなくなり、また中継用接続装置を介して整流装置に接続されるので、引出線の曲げ加工をしてから整流装置に接続する必要もなくなる。従って、接続の構成が簡易になり、接続の信頼性が向上する。

【0101】この発明の請求項2に記載の車両用交流発電機によれば、固定子巻線が三相の巻線を有し、中継用接続装置は出力用接続部が中性点を外部に引き出しうようにされたものである中性点側の中継用導電部材及び出力用接続部が相電圧を外部に引き出しうようにされたものである3個の相電圧側の中継用導電部材が設けられたものであって、中継用接続装置の中性点側の中継用導電部材の引出線接続部に三相の巻線の中性点側の各引出線が接続されるとともに相電圧側の中継用導電部材の引出線接続部に三相の巻線の相電圧側の引出線がそれぞれ接続されて三相の巻線が星形結線されて相電圧側の中継用導電部材の出力用接続部から三相交流出力が出力され、整流装置の交流側が相電圧側の中継用導電部材の出力用接続部に接続され三相交流出力を直流出力に整流するものであるので、三相の巻線は中継用接続装置の各中継用導電部材を介して三相星形結線され、引出線同士をねじって接続したりあるいは曲げ加工のために引出線に不要な外力を加えたりする必要がなく、また中継用接続装置を介して整流装置に接続されるので、引出線の曲

50

(13)

23

従って、接続の構成が簡易になり、また接続の信頼性が向上する。また、中性点を中継用接続装置の外部に引出す必要の有無にかかわらず、一種類の中継用接続装置を用いて対応でき、中継用接続装置の標準化が可能である。

【0102】この発明の請求項3に記載の車両用交流発電機によれば、三相の巻線がそれぞれ複数のコイルを有するものであり、この複数のコイルが中性点側の中継用導電部材及び相電圧側の中継用導電部材を介して並列に接続されたものである。三相の巻線の各複数のコイルは中継用導電部材を介して並列に接続され引出線を経て接続しなくてよい。従って、接続の構成が簡易になり、接続の信頼性が向上する。

【0103】この発明の請求項4に記載の車両用交流発電機によれば、中継用導電部材の接続用導体部が板状の形状にされたものであり、支持部材が成形用絶縁材料により上記板状の接続用導体部と一体に円弧板状に成形されたものである。接続用導体部及び支持部材がともに板状であり、板厚方向の寸法が小さくなり、車両用交流発電機の軸方向寸法が長くないようにできる。また、支持部材が接続用導体部と一体に成形されているので、製作が容易である。

【0104】この発明の請求項5に記載の車両用交流発電機によれば、中継用導電部材の接続用導体部の少なくとも一部が支持部材から露出されたものであり、通電によるジュール熱の放熱が良くなり、温度上昇を低く抑えることができ、信頼性が向上する。

【0105】この発明の請求項6に記載の車両用交流発電機によれば、中継用接続装置の引出線接続部に引出線が冶金接合により接続されたものである。ソルダレス接続となり、作業が容易で接続の信頼性も向上する。

【0106】この発明の請求項7に記載の車両用交流発電機によれば、中継用接続装置の引出線接続部と引出線との冶金接合を支持部材の固定子側と反対の側に行われているものである。接合作業のための空間を中継用接続装置と固定子との間に設けなくともよく、車両用交流発電機の軸方向寸法が長くないようにできる。また、冶金接合の作業が容易である。

【0107】この発明の請求項8に記載の車両用交流発電機によれば、整流装置が板状の交流側端子を有するものであり、中継用接続装置の中継用導電部材の接続用導体部と出力用接続部とが板状の導体で一体に形成されたものであり、整流装置の交流側端子が出力用接続部に固定子の軸方向に締付部材により締付けられて接続されたものである。車両用交流発電機の軸方向寸法が長くないようにできる。また、整流装置の交流側端子を中継用接続装置の出力用接続部に締付部材により締付けて接続するので、接続作業が容易でかつソルダレスで接続が可能となり、信頼性が向上する。

特開平9-19119

24

【0108】この発明の請求項9に記載の車両用交流発電機によれば、中継用接続装置の支持部材がその外周部に設けられた切欠きを有し、各引出線接続部がこの切欠き部に配設されるとともに径方向外方から引出線を挿入しうるようにされたものである。中継用接続装置を径方向に移動させて径方向外方から各引出線を挿入して接続でき、引出線を中継用接続装置に貫通させるために引出線接続部にきちんと位置合わせする必要がなく接続が容易である。

【0109】この発明の請求項10に記載の車両用交流発電機によれば、回転子がブラケット内に外気を吸入する冷却ファンを有するものであり、中継用接続装置がブラケット内に配設され支持部材が冷却ファンの羽根と軸方向に対向するものである。ファン効率が向上し、冷却性能がよくなる。また、ファンの騒音も低くなる。

【0110】この発明の請求項11に記載の車両用交流発電機によれば、支持部材がその外周部が固定子側に傾いた傾き部分を有するものである。ファンによる冷却風が固定子側へ効果的に導かれ、冷却性能が良くなる。

【0111】この発明の請求項12に記載の車両用交流発電機によれば、引出線が局部的曲げ部を有するものであり、この局部的曲げ部を介して中継用接続装置の引出線接続部に接続されたものである。局部的曲げ部が変形することにより、引出線の引出位置の誤差を吸収し、振動や温度変化にともなう膨張収縮による応力を緩和する。従って、組立が容易になるとともに接続の信頼性が向上する。

【図面の簡単な説明】

【図1】 この発明の一実施例を示す電機子の斜視図である。

【図2】 図1に示すサーキットボードを図1の下から見上げて示す正面図である。

【図3】 図1に示すサーキットボードを図1の上から見て示す背面図である。

【図4】 図1の実施例における発電機の要部を示す要部断面図である。

【図5】 図1の実施例における補助端子板を示す平面図である。

【図6】 図1の実施例におけるダイオードの端子を示す平面図である。

【図7】 図1の実施例における発電機の回路図である。

【図8】 この発明の他の実施例を示す発電機の要部を示す要部断面図である。

【図9】 図8の実施例における整流装置の斜視図である。

【図10】 図8の実施例における整流装置の冷却板部分を示す平面図である。

【図11】 図10における切断面A-Aにおける冷却

特開平9-19119

(14)

26

25

板部の断面を示す断面図である。

【図12】 図8の実施例における整流装置の補助端子板の平面図である。

【図13】 図12における切断面B-Bにおける断面を示す断面図である。

【図14】 さらに、この発明の他の実施例を示すもので、サーキットボードを電機子側から見て示す正面図である。

【図15】 図14のサーキットボードを電機子の側と反対の側から見て示す背面図である。

【図16】 さらに、この発明の他の実施例を示す発電機の要部を示す要部断面図である。

【図17】 図16のサーキットボード部分の断面を示す断面図である。

【図18】 さらに、この発明の他の実施例を示す発電機の要部を示す要部断面図である。

【図19】 さらに、この発明の他の実施例を示す引出線のベンドの形状を示す模式図である。

【図20】 従来の発電機を示す断面図である。

【図21】 図20の発電機の回路を示す回路図である。

【図22】 図20の電機子巻線の巻装状態を示す概略図である。

【図23】 図20の電機子巻線の引出線の配置を示す説明図である。

【図24】 図20の電機子の斜視図である。

【図25】 図20の電機子の組付けを説明するための説明図である。

【図26】 図20の整流装置の冷却板部分の詳細を示す平面図である。

【図27】 発電機の他の回路例を示す回路図である。

【図28】 図27の回路を有する場合の電機子を示す斜視図である。

【符号の説明】

* 2、12、22 リヤブラケット

34b 冷却ファン

5 電機子

51 電機子鉄心

52 電機子巻線

53 第一の三相巻線

53as、53bs、53cs 各相コイルの巻始めの引出線

53ae、53be、53ce 各相コイルの巻終りの引出線

10 引出線

53n 中性点

54 第二の三相巻線

54as、54bs、54cs 各相コイルの巻始めの引出線

54ae、54be、54ce 各相コイルの巻終りの引出線

54n 中性点

55、155 三相接続引出線

158、158a~158e ベンド

20 17、27、37 サーキットボード

171、271、371 基板

171a~171j 窓部

172、173、174、175 インサートターミナル

172a、173a、174a、175a~175f

引出線接続部

172b、173b、174b、175g 接続端子

172c、173c、174c、175h 導電板

176 ボルト

30 271a~271j 切欠き部

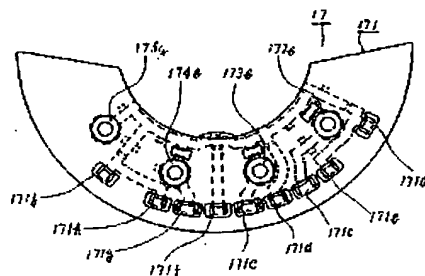
378 傾き部

18、28、38 整流装置

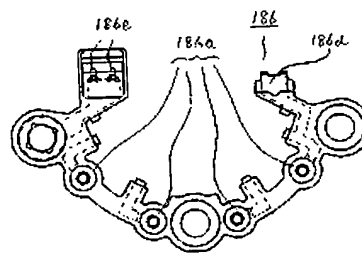
186、286 補助端子板

* 186a、286a 端子

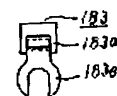
【図2】



【図5】



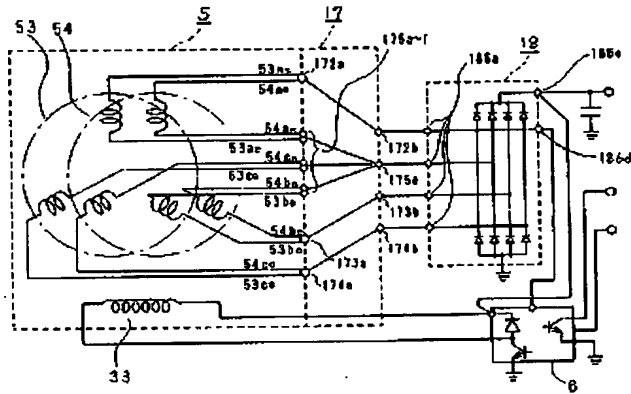
【図6】



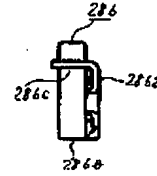
(16)

特開平9-19119

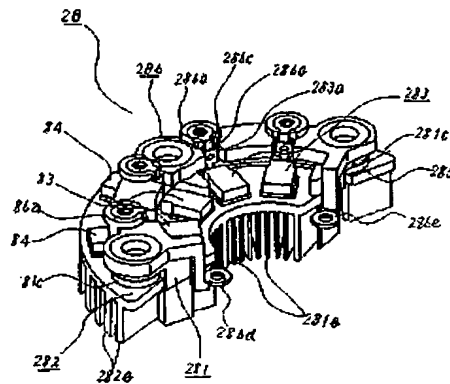
【図7】



【図13】



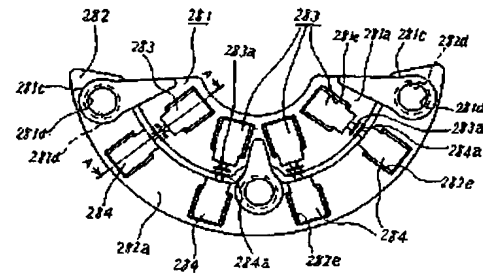
【図9】



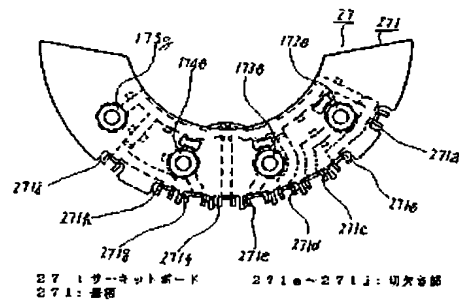
28 : 整流回路
28a : 整流用半導体

28b : 端子

【図10】

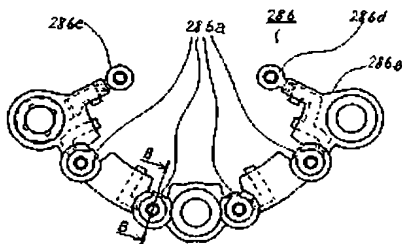


【図14】



27 : サーキットボード
271 : 基板
271a ~ 271z : 切欠部

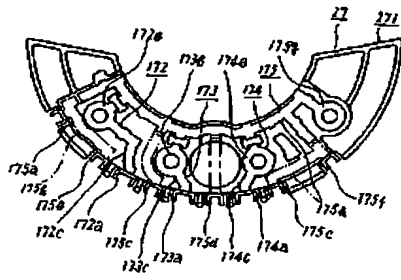
【図12】



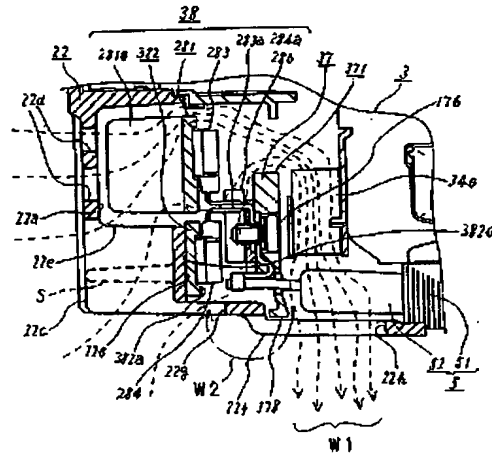
(17)

特開平9-19119

【図15】

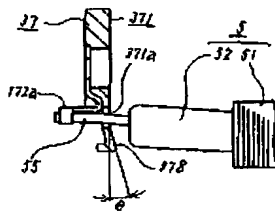


【図16】



36 : 駆動部
37 : ワーキングボード
371 : 基面
378 : 軸芯部

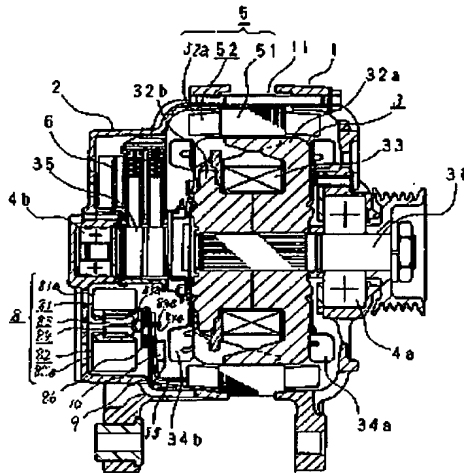
【図17】



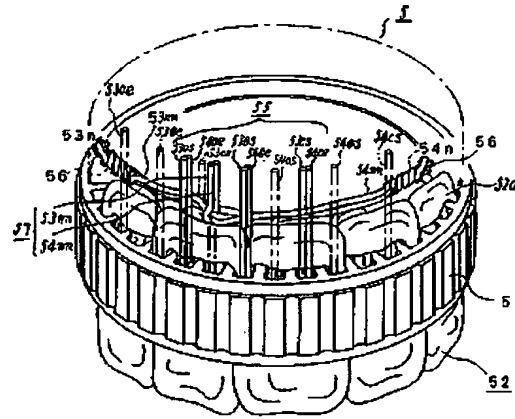
(18)

特開平9-19119

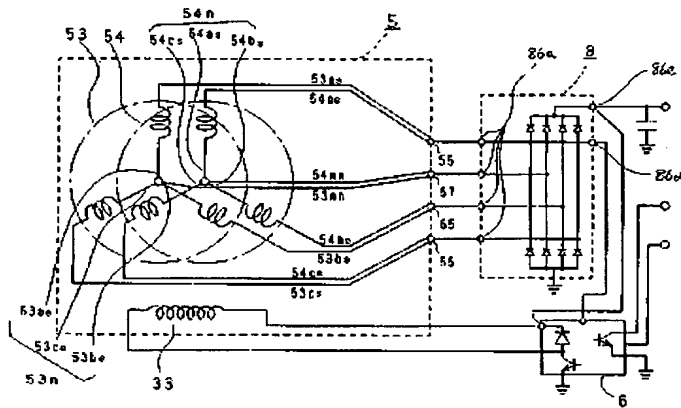
【図20】



【図24】



【図21】



(20)

特開平9-19119

【図28】

